

書評

和田明美著

## 『古代日本語と万葉集の表象』

阿部 裕

本書は、著者である和田明美氏の長年にわたる論考をまとめたものである。書名に「古代日本語」「万葉集」「表象」という言葉が含まれるように、古代日本語表現が『万葉集』をはじめとした文学作品においてどのような表象を担っていたのかについて様々に考察されている。周知のように、『万葉集』は八世紀に成立した現存最古の和歌集である。『万葉集』に収載されている歌は古代人が古代日本語を用いて詠んだものであるため、その歌意を正しく捉えるには古代日本語への理解が不可欠となる。しかし、古代日本語、特に上代日本語の語彙・文法に関しては、同時代の日本語資料が漢字表記の韻文に偏るという制約もあり、未だ十分に明らかになっていないと言えない。そのため、歌意解釈に揺れや曖昧さがある場合が少なくない。本書には、『万葉集』の歌に用いられている古代日本語の意味を精確に把握することによって歌

意を捉えなおす試みが多く収められている。

全体は三部構成になっている。第一章「古代日本語による東西国境の表象」は、旅に関わる万葉歌を中心に、その表象に関する論考をまとめている。全三章のうちもっとも多くの紙幅が割かれており、本書の中心となる章といえよう。第二章「古代的象徴表現と万葉集の表象」は、象徴表現としての序詞・枕詞について考察した論考をまとめたものである。第三章「古代日本語表現と万葉歌」は、『万葉集』における未だ解釈の定説を見ない構文について検討した論考を集めている。以下、本書の流れに沿ってその内容を詳しく紹介していきたい。

第一章「古代日本語による東西国境の表象」の目次は以下の通りである。

- 一 古代日本の道と国境・越境の文字文化
- 二 古代東海道と東西越境地域の「渡り」

三 古代日本語「しかすが」歌枕「しかすがの渡り」  
四 「坂」(峠)への祈りと万葉歌

一 「神の御坂」を詠む防人の歌(巻二〇・四四〇  
二)

五 持統天皇伊勢国行幸と万葉歌

六 持統太上天皇參河国行幸と万葉歌

七 人麻呂歌の「あまとか見らむ旅行くわれを」の意  
味

「一 古代日本の道と国境・越境の文字文化」における「国境」地域とは、三遠南信地域(三河・遠州・南信州)である。和田氏がこのエリアに注目するのは、「東国(信濃・遠江以東)と西国との国境に位置する地域」(五頁)であり、歴史的に「千数百年のあいだ東西文化が出会う地として分断と融合・連繫(連携)の二面性を内包する独自の文化を形成してきた」(同)ためである。論考において和田氏が特に注目するのは「坂」(峠)と「渡り」である。西国と東国を結ぶ東海道・東山道には難所ともいべき危険な「坂」(峠)が複数あり、その代表的なものが東山道の「神坂峠」である。古代において神坂峠頂上付近では祭祀が行われており、万葉歌にも詠まれてきた歴史がある。また、神坂峠近くの「園原」も平安期以降の文学作品にたびたび登場している。一方、

「渡り」において注目されるのは、東海道の豊川河口に存在したとされる「しかすがの渡り」(渡津)である。同所は川幅の広さ・水量の多さによる難所として知られており、歌枕としてしばしば和歌に詠まれてきた。和田氏は「我が国の東西の「国境」「越境」がリアリティーを持っていた時代の文字文化は、独自性に裏打ちされた融合的で重層的な魅力を蔵していた」(二三頁)とする。そのうえで、「国境や越境を念頭に置きつつ「古代道制」のもとでの「峠」と「渡り」の文字文化を解き明し、東山道・東海道を擁する三遠南信地域の文化的特性を把握する」(同)ことを重視し、以下の論考を行う。

「二 古代東海道と東西越境地域の「渡り」は、「東西越境地域の「渡り」に相当する古代東海道の「渡津」「しかすがの渡り」にスポットを当て、古典文学や文字資料をもとにその特質を捉えなお」(一六頁)すものである。本節では、東海道の由来とその整備、史料や古辞書における「渡津」についての記述、『更級日記』における「渡り」に関する叙述、中古から中世の文学作品における「しかすがの渡り」の用例について紹介されている。もとは「二律背反・逡巡する心」を表す表現であった「しかすが」「しかすがに」が歌枕として定着した理由について考察されているが、この点については次節が

より詳しい。さて、この「しかすがの渡り」は「渡津」のことであるというが、この点についてはもう少し説明・解説が欲しかった。「渡津」という地名は『延喜式』などの歴史資料（史料）や『和名類聚抄』といった古辞書に見られるが、同資料には「しかすがの渡り」は見られないという。一方、中古・中世の文学作品には「しかすがの渡り」が用いられる。つまり、「渡津」の別称が「しかすがの渡り」であることを明示する文献は無いようである。とすれば、「しかすがの渡り」を「渡津」と同定する根拠を知りたくなるが、「一〇世紀初めに源順が醍醐天皇の命により編纂した『和名類聚抄』の「渡津」（和多無都）は、「しかすがの渡り」に相当する」（前節・一頁）、「渡津」（駅名）のあたりは「しかすが、その「渡り」は「しかすがの渡り」と称されていたようである」（二二頁）のように書かれているのみである。諸点を考慮すると「渡津」を「しかすがの渡り」と考えるのがもっとも合理的なのであるが、この点についてはもう少し明瞭な言及が欲しく、やや消化不良の感が残る。

「三 古代日本語「しかすが」歌枕「しかすがの渡り」では、引き続き「しかすがの渡り」について考察される。まず『万葉集』と八代集における「渡り」を詠んだ歌の類似と相違を明らかにし、「しかすがの渡り」が平安時

代以降詠まれるようになったことを述べる。これが後に歌枕となるのだが、その特質は古代日本語「しかすが」のイメージが重ねられている点にあるようだ。これは前節に詳しく述べられている事柄だが、「しかすが」は『万葉集』では「しかすがに」という形で用いられており、「然+す+が（に）」からなる古代日本語で、「……ではあるが……」「……ではあるがなお……」の意味」（三〇頁）、すなわち「二律背反・逡巡する心」を述べる表現とされる。また、「渡津」が「しかすがの渡り」と呼ばれるようになった理由は、「土壌が堆積した豊川河口の中州としての「すか」に基づく「しかすが」（二二頁）であるという。かような「しかすがの渡り」が歌枕として定着した理由を、和田氏は「容易に渡ることのできな

い東西越境・三遠クロスボーダーの難所「しかすがの渡り」は、現状を認めつつ反転する思考に基づく『万葉集』の「しかすがに」の本義を活かしつつ、逡巡し思案する心を具象化する絶好の地名歌枕となった」（六四頁）と分析する。歌枕「しかすがに」の定着に本来の語のイメージが関与したとする考えは興味深い。

「四 坂」（峠）への祈りと万葉歌―「神の御坂」を詠む防人の歌（巻二〇・四四〇二）」は、『万葉集』における「古代日本人の「坂」への祈りの歌」について考察

したものである。『万葉集』には神坂峠、碓氷峠、足柄峠などの坂(峠)が詠まれているが、和田氏が特に注目するのは神坂峠を詠んだ巻二〇・四四〇二番歌「ちはやぶる神の御坂に幣奉り斎ふ命は母父がため」である。同歌について氏は、「人間の力を越えた神威や猛威を畏怖し恐懼した古代日本人の思考が生み出した表現」(八一頁)である枕詞「ちはやぶる」が坂を詠んだ歌のうち「神の御坂」(神坂峠)を詠む当該歌にのみ冠されていること、「父母」ではなく「母父」のために自らの命の無事を祈っていることなどから、当該歌の独自性を指摘する。

「五 持統天皇伊勢国行幸と万葉歌」では、持統天皇の伊勢国行幸に際して詠まれた柿本人麻呂の歌(『万葉集』巻一・四〇番歌〜四二番歌)の歌意を、丁寧な分析によって捉えなおしている。当該歌の題詞は「幸于伊勢国時、留京柿本朝臣人麻呂作歌」、歌は「あみの浦に船乗りすらむをとめらが珠裳の裾に潮満つらむか」(四〇)、「釧着くたふしの先に今もかも大宮人の玉藻刈らむ」(四一)、「潮さぬにいらこの島辺漕ぐ船に妹乗るらむか荒き島廻を」(四二)である(訓読は和田氏によるが、表記は私に一部改めた)。これらの歌は従来「海浜での遊樂や遊興を詠む美しい想像の歌と解されてきた」(二二三頁)が、和田氏はそれに異を唱える。そして、

各歌に詠まれた事物や表現をひとつひとつ丁寧に分析・検討することにより、これらが京に留まった柿本人麻呂の、危険な旅の道中にある一行に対する「危惧と無事への祈り」の歌であることを明らかにする。

「六 持統太上天皇参河国行幸と万葉歌」は持統太上天皇の参河国行幸に際して詠まれた高市黒人の歌「いづくにか船泊てすらむ安礼の崎漕ぎ廻み行きし棚無し小舟」(巻一・五八番歌。表記は私に改めた)について考察するものである。当該歌の「船泊て(す)」「漕ぎ廻み行く」「棚無し小舟」といった語句や、「いづくにかうらむ」という構文の獨創性について論じ、「黒人は従来 of 伝統的で儀礼的な寿ぎや手向けの域からの脱却を試みている」(二四七頁)「安礼の崎」の歌はその先蹤とも言える」(同)と結論する。

「七 人麻呂歌の「あまとか見らむ旅行くわれを」の意味」は、『万葉集』巻三・二五二番の柿本人麻呂歌「荒栲の藤江の浦に鱸釣るあまとか見らむ旅行くわれを」の解釈について検討するものである。この歌が詠まれた衝迫については、「官人としてのわれが、下層階級の「あま」と見られることを心外に思う心、もしくはうらぶれた胸中を表出したもの」(一五三頁)「藤江の浦の景勝への感動を詠じたもの」(同)という二つの解釈がなされてき

たという。しかし、和田氏はいずれの解釈にも否定的な立場をとる。そして、語句や構文の丁寧な分析によって「留意すべきは「あま」と「われ」ではなく、「鱸釣るあま」と「旅行くわれ」が対比されている表現事実である」（二七三頁）とする。そのうえで、同じように藤江の浦で船に乗っていても「その日の内に妹のもとへ帰ることができる」（一九〇頁）あまと、「家人の待つわが家へ帰ることも儘ならない」（同）われとを対比するものであると指摘する。すなわち、この歌は「妹と別れて旅をしているわが苦衷や孤独感が理解されないことへの憂慮に基づく歌」（一九一頁）と理解するべきなのである。説得力のある解釈といえよう。

第二章「古代的象征表現と万葉集の表象」の目次は以下の通りである。

- 一 古代的自然把握と象徴表現
- 二 序詞の機能と構造
- 三 枕詞の機能と構造
- 四 序詞の象徴機能と枕詞
- 五 東歌の序詞表現
- 六 東歌の地名と地名表象

「一 古代的自然把握と象徴表現」は、枕詞や序詞について論じている。古代日本において自然は単に景観と

して観照する対象ではなく、「一見自然詠と思われる作品ですらも、自然の景物に人事を投影していることが少なくない」（一九九頁）、「古代日本人は、自然の景物を人間の姿や心の投影としてながめ、人事を重ねながら見た」（同）という。人の姿や心を自然に投影させながら形象化する表現として和田氏が注目するのが枕詞や序詞である。特に序詞を「自然の営みや事物・事象に人事を投影しつつそれを具象化する表現―古代的象征表現―の一種」（二〇三頁）とし、その構造や機能を分析する。同様に地名も、「土地の名やその意味と関わる具象的なイメージを担っていた」（二〇八頁）ものであり、「後世のような観念的な歌枕とは異質であり、また単に土地の景観や地名そのものを詠んでいるのではない」（二〇七頁）とする。そのうえで「古代歌謡や『万葉集』の表現は、抽象的・論理的思考が未発達であった時代の、具象的・情緒的思考の産物である」（二〇九頁）と述べるが、古代を「抽象的・論理的思考が未発達であった時代」と断ずるのは疑問が残る。韻文における表現技法が異なるからといって、それを当時の人々の思考力の発達度合いと直接的に結びつけるのは危険ではないだろうか。

以下、しばらく序詞・枕詞に関する論考が続く。「二 序詞の機能と構造」「三 枕詞の機能と構造」では、特

に助詞「の」に注目して考察されており、「の」が主格であること、したがって「序詞や枕詞全体は主述の構造からなっている」(二二七頁) ことを明らかにする。「四序詞の象徴機能と枕詞」は、序詞と枕詞は象徴機能が異なること、序詞が「枕詞の象徴機能をイメージ豊かに補う表現形式」(二三九頁)であることを論じる。「五東歌の序詞表現」は近畿圏を中心とする歌と東歌の序詞の相違、東歌の序詞の独自性に着目している。中でも、鴨を含む序詞に関する指摘が興味深い。近畿圏の歌人たちが「もっぱら池や水上にいる水鳥としての「鴨」の習性に着目し、その姿や行爲を詠じている」(二四九頁)のに対し、東歌の「水くく野に鴨の這ほのす児ろが上に言緒ろ延へていまだ寝なふも」(巻十四・三五二五)は陸上における「鴨」に着目している点で独創的であるという。実際に、鴨は水鳥ではあるが頻繁に陸上で採餌するので、東歌の歌人が「自然の営みを的確かつリアルに」(二五〇頁) 捉えているという推測は首肯できるものである。

「六 東歌の地名と地名表象」では、『万葉集』巻十四に収載された東歌の地名に着目し、巻二十収載の防人歌など他巻の歌、さらには『延喜式』とも比較しながらその特徴を探っている。東歌と防人歌はいずれも東国の歌

でありながら共通する地名は少ないことなど、重要な指摘がなされている。

第三章「古代日本語表現と万葉歌」の目次は以下の通りである。

一 「逢ふ夜」「逢はむ夜」「逢ふべき夜」 助動詞連体形の意味と機能

二 古代日本語「忘れて思へや」の構文と意味

三 古代日本語「ずは(ば)」について

四 万葉集「人妻ゆゑ(に)」について

「一 逢ふ夜」「逢はむ夜」「逢ふべき夜」助動詞連体形の意味と機能」は『万葉集』中における類似表現「逢ふ夜」「逢はむ夜」「逢ふべき夜」の意味把握について論じたものである。山田孝雄や時枝誠記による伝統的な文法論を援用しながら論じているが、文法的な考察が短く淡泊である。『万葉集』に「無助詞(φ)・む・べし」による連体修飾が揃っている点は興味深いので、「逢ふ夜」「逢はむ夜」「逢ふべき夜」の相違についてもっと深く切り込んでほしかったと思う。

「二 古代日本語「忘れて思へや」の構文と意味」は『万葉集』中の「忘れて思へや」という表現に注目したものである。従来「忘れて思へや」は「(われ)忘れめや」「思ひ忘れめや」「忘れむと思へや」などに相当する表現

とされてきたという。和田氏はこのことを疑問視し、「忘れて思へや」の「思ふ」と「忘る」は対象が異なり、(a)を「忘れて」bを「思へや」を含蓄する表現形式であることを主張する。

「三 古代日本語「ずは(ば)」について」は、未だその解釈に定説を見ず議論の対象となる「ずは(ば)」について論じるものである。従来行われてきた本居宣長や橋本進吉による説の再検討を行い、「Aずは(ば) B」構文について「助詞「は」ではなく条件節を形成する「ば」(三三三頁)であること、「肯定の仮定条件に対する否定の仮定条件構文と見なされる」(同) ことを述べる。

「四 万葉集「人妻ゆゑ(に)」について」は、順接も逆接も表しうるとされる「ゆゑ(に)」について、特に『万葉集』巻一・二一番歌「紫草のにはへる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ恋ひめやも」に注目して論じている。『万葉集』中の「ゆゑ(に)」や「未然形+ばくめやも」構文について検討を加え、「人妻ゆゑに」が直接「われ恋ひめやも」へ続いていると見なすことはできない(三五四頁)。「人妻ゆゑに」は人妻であるがゆえに、一層詳しいことを表す表現形式」(同)と結論する。

以上のように、本書は『万葉集』における表象につい

て多彩に論じている。特に歌意の解釈については、興味深く首肯できる論が多いように思われる。一方、一部には首肯しかねる記述も見られるので、稿者が感じたことを二点ほど述べてみたい。

まず気になったのは、十分な説明あるいは根拠の明示を行わず、断定的に記述している箇所が散見される点である。「渡津」が「しらすがの渡り」と同定される理由に関する説明が欲しかった点や、古代を「抽象的・論理的思考が未発達であった時代」とすることに疑問が残る点についてはすでに述べたが、ここでは「ちはやぶる」に関して指摘しておきたい。第一章四節では「ちはやぶる」に着目した考察が行われているが、その語源についての記述には説明不足の感がある。和田氏は「古代日本語「ちはやぶる」は、動詞「ちはやぶ」の連体形(上二段)で、「ちはやぶ」は「ち」(風の古語・威力) + 「はや」(速・早) + 「ぶ」(動詞接尾辞で「荒ぶ・和ぶ・詫ぶ」等の「ぶ」と同一)からなる」(八一頁、傍線評者)と断定的に述べる。風の古語としての「ち」とは、たとえば「東風(こち)の「ち」などを指すのだと思われる。しかし、「ちはやぶ」の語源については「イチハヤブの連体形イチハヤブルの語頭母音が脱落した形であろう」(山口佳紀『古代日本語文法の成立の研究』有精堂、一

九八五)、「祝詞に「一速比給」(鎮火祭)とあるイチハヤブ(上二段)が修飾語として固定したものであろう」(『時代別国語大辞典上代編』三省堂)といった説もある。この場合、「ち」は「巖いづ」と同根と推測される形状言「イチ」に由来することになるが、むしろこちらの方が定説であると思われる。無論、どの説を採用するかは和田氏の考えによるものであり、先の説を否定するつもりはない。また、「ち」の由来がいずれであったとしても「ちはやぶる」という枕詞の意味そのものに大きな違いはないであろう。しかし、「ちはやぶる」に注目しその語源に言及する以上、他にも有力な説があることには触れてほしかったと思う。「ちはやぶる」に限らず、古代日本語の語句や構文の意味、語源などについては不確かで断定を避けるべき点が多い。「古代日本語」は書名にも冠される本書の重要なテーマであり、その記述には一層の慎重さが求められよう。

次に、近年発表された他の研究者の論考がほとんど反映されていない点である。たとえば、第一章五節では対象歌において「らむ」が多用されることに注目し、従来の研究では「単なる現在推量や想像を表す助動詞と見なしてきた」(一二三頁)「らむ」の機能を「不安や心配を抱かせる事柄・事態に関する主体の推量判断」(一〇七

頁)「対象を思い遣りつつ案ずる主体の推量の表現」(一二二頁)であると述べる。「らむ」が伝統的に現在推量・原因推量を表すと見なされてきたことは確かであり、そのような単純な理解に異を唱える和田氏の立場は理解できる。一方、古代日本語の「らむ」についての論考は近年においても盛んに行われており、栗田岳(二〇一一)「しづ心なく花のちるらむ」ーム系助動詞と「設想」『日本語の研究』七一、小出祥子(二〇一二)「上代におけるラムの意味的機能について」日本語学会二〇二二年度春季大会口頭発表、仁科明(二〇一六)「上代の「らむ」―述語体系内の位置と用法―」『国語と国文学』九三―三などがその代表的なものである。とすれば、やはり近年の論考に対する和田氏の立場、自身の論との整合性についての見解などを知りたくなるが、全く言及がない点が残念である。同様に、第三章三節は「ずは(ば)」について論じているが、近年における他の研究者による「ずは」の論考は注において著者名やタイトルが紹介されているだけであり、それらについての和田氏の考えは本文中には見られない。本書は氏の長年の論考をまとめたものであり、論の初出から本書の刊行までに長い年月を経ていくものもみられる。そのため、最新の論考への言及が少ないことについては、やむを得ない部分もある



のかもしれない。しかし、せっかく新しく刊行するのであるから、加筆修正等の際に近年の論考についての言及も加えてほしかったというのが率直な感想である。

このように、細かな点では物足りない部分もあるものの、本書は総じて興味深い内容であり、面白く読むことができた。全体として『万葉集』中の言語表象を豊富な用例を挙げながら検討しており、さまざまな歌に触れることができる。また、特に第一章においては東海地方周辺のなじみ深い土地が多く登場する。そのため、特に私のような東海地方在住であり古代日本語に関心を持つ者にとっては、一読の価値ある書といえる。

本書には古代日本語文法に言及している箇所が多くあるが、和田氏の研究態度はひとつひとつの用例を作歌背景も含めて丹念に読み解いていくというものであり、近年多くみられるようなコーパスを利用して大量のデータ分析を行う文法研究とは方向性が異なる。しかし、『万葉集』などの歌に用いられた言葉を対象とする場合、その歌においてその言葉が選択されたのはなぜなのかを慎重に検討していく必要がある、用例を丁寧に読み解く作業を蔑ろにはできない。本書は、今なお色褪せない古典文学を「読む」ことによる古代日本語研究の実践例のひとつと評価できるだろう。

二〇二三年三月一〇日刊、汲古書院、A5判、三八〇頁、

一〇〇〇〇円＋税

(あべ・ひろし／愛知教育大学助教)